

事案名	留萌市（峠下）の事案（北海道１－６－１）
フォローアップ調査資料	<ul style="list-style-type: none"> ・証言〔１〕 ・「厚別弾薬庫 開設１０周年記念誌」昭和３８年２月１日〔２〕 ・『北海道新聞』（留萌・宗谷版）平成６年８月１０日〔３〕 ・「るもい再発見」〔４〕 ・『読売新聞』平成１５年９月２日〔５〕 ・『北海道新聞』『毎日新聞』平成１５年９月３日〔６〕 ・『朝日新聞』平成１５年９月４日〔７〕 ・証言〔８〕 ・『北海道新聞』（留萌・宗谷版）平成１５年９月５日〔９〕 ・「『旧軍毒ガス弾等の全国調査』のフォローアップ調査に係る留萌の事案について」平成１５年９月２４日〔１０〕 ・『北海道新聞』（留萌・宗谷版）平成１５年９月２５日〔１１〕 ・『日刊 留萌』平成１５年９月２６日〔１２〕
追加資料	<ul style="list-style-type: none"> ・『平成１６年度国内における旧軍毒ガス弾等に係る情報収集及び取りまとめ業務報告書』〔Ａ１〕 ・証言（元陸軍兵器補給廠厚別常駐班の曹長）〔Ａ２〕 ・「国内における毒ガス弾等に関する総合調査検討会（第８回）」資料８〔Ａ３〕
平成１５年度フォローアップ調査報告書の要約	<p>終戦時、陸軍兵器補給廠が保有していた毒ガス弾等は、米軍進駐までに、小樽湾に海洋投棄及び北海道留萌市内の廃坑に埋設し、爆破処理された。</p> <p>廃棄・遺棄情報</p> <ul style="list-style-type: none"> ・元陸軍兵器補給廠厚別常駐班の曹長の証言によれば、「昭和２０年８月１８日から２０日頃までに、陸軍兵器補給廠厚別常駐班保有の毒ガス弾（くしゃみ剤貨車約５輦分）を、証言者の指揮の下、留萌市内の廃坑内に詰め、爆破処理した」と記載されている〔１〕。 ・終戦時に、厚別弾薬庫では９月１７日の米軍進駐迄に終戦処理が行われ、「貨車７輦分に及ぶ大量の催涙ガス弾は小樽沖と留萌沖において海中処分を図った」が、小樽沖では浮いて沈まない缶を沈ませようとしていたところ、缶が発火して全体に着火し、作業をしていた見習士官数名が死亡した。このため、海中投棄の計画を急遽変更し、留萌市内の廃坑に入れ爆破処分したと記載されている〔２〕。 ・新聞記事によれば、証言者は、昭和２０年夏に証言者の父親ら地域の人たちがトラックで運ばれた木箱を何度も留萌市郊

	<p>外の山中に運び込んだ後に爆破された。その後付近の道路に差しかかる度に目がチカチカして涙が出たり、くしゃみ、鼻汁が出て、のどが痛くなった。山中のアカダモの木がほとんど枯れてしまったとのこと。また、別の住民は、「終戦後、時期ははっきり記憶していないが、『峠下地区に催涙ガスのようなものが漏れているとの情報で調査に来た』という道の職員を現地に案内したことがある」と証言している〔3〕〔4〕。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新聞記事によれば、北海道が元陸軍関係者から、札幌市内の爆薬庫に「くしゃみ弾」が貨車7輛分あり、「そのうちの5輛分を留萌市内の廃坑に埋めて爆破し、2輛分は小樽市内の祝津港沖に投棄した」との証言を得ている〔5〕〔6〕〔7〕。 ・住民の証言によれば、「昭和20年11月頃に、妻から留萌市内の廃坑内で毒ガスを廃棄したとの話を聞いて爆破処理現場を訪れてみたら、坑道口から入ると整然と並べられた木箱やジュースの空き缶のようなものが散乱していたが、いずれも中身は吹き飛んでいて無かった。坑道の中にはガスが残っていたので、くしゃみや鼻水等に苦しんだ」と記載されている〔8〕〔9〕。 <p>現在の状況</p> <ul style="list-style-type: none"> ・留萌市内の廃坑でくしゃみ弾を爆破処理した場所を特定し、9月18日に、周辺地区の環境影響を調査するため、河川水（沢水を含む）、地下水（飲用井戸）の水質調査をおこなった。その分析結果において、ヒ素濃度は、いずれの地点も環境基準値を下回った〔10〕。この結果は各紙で報道されている〔11〕〔12〕。
<p>新たな情報</p>	<p>廃棄・遺棄情報</p> <ul style="list-style-type: none"> ・元陸軍満州16222部隊所属の帰還兵は、終戦直後、市内を流れる川沿いにある炭鉱（付近に炭住があった）に毒ガス弾を埋設し爆破処理した、ということを経営者の監督官から聞いたと証言している〔A1〕。 ・戦後峠下で毒ガス弾を埋設・爆破処理した際に毒ガス弾運搬に従事した住民の証言によれば、昭和20年8月25日から10月までの間の1日（あるいは数日）のうちに、国道からカルバートの下をくぐって250～300mほど沢を登ったところにある試掘鉱の前まで毒ガス弾を運んだ。部落の住民が総出で何回も運んだと証言している（ただし、試掘鉱内への搬入および爆破には立ち会っていない）〔A1〕。 ・元陸軍兵器補給廠厚別常駐班の曹長は、昭和20年8月18日から20日頃までの間に陸軍兵器補給廠厚別常駐班保有の

毒ガス弾（くしゃみ剤貨車約5輛分）を爆破処理した場所は、峠下駅から約1kmの距離にあり、踏切を渡って市内を流れる川沿いに走る道から40～50mの地点にあった廃坑内であったと証言している〔A2〕。

発見・被災・掃海等処理情報

- ・戦後峠下で毒ガス弾を埋設・爆破処理した際に毒ガス弾運搬に従事した住民の証言によれば、「運搬が終わり40分くらいかかって自宅に戻ったとき（午後5時ごろ）爆発音を聞いた。そのときは、目やのどが痛み、鼻水が出たりした。山のアカダモの木はその後芽が出なかった。稲もかれたので翌日パサパサになった稲を刈った」と証言している〔A1〕。なお、同証言者によれば、炭鉱の位置を知っていたが、そこで埋設・爆破処理したことはない（知らない）としている〔A1〕。

その他情報

- ・環境省が実施した地下水調査の結果、毒ガス関連成分は検出されなかった〔A3〕。

事案名	留萌市内の事案（北海道 1 - 6 - 2）
フォローアップ調査資料	<ul style="list-style-type: none"> ・化学室担当者ノート「戦後における旧軍毒ガス弾等の処理の状況(14.6)」〔13〕
平成15年度フォローアップ調査報告書の要約	<p>昭和37年6月12日に、北海道留萌市で、くしゃみ性ガス（弾）が発見され、処理したと記載されている。</p> <p>発見・被災・掃海等処理</p> <ul style="list-style-type: none"> ・昭和37年6月12日に、北海道留萌市で、くしゃみ性ガス（弾）が1本発見され、自衛隊が爆破処理したと記載されている〔13〕。